1989年4月5日発行 毎月1回5日発行 1984年7月10日第三種郵便物認可 ISSN 0286 4479

POLAND MONTHLY ／ BIULETYN POLSKI

ポーランド月報

1989年
4月号
(通巻85号)
400円

円卓会議からの報告
アンジェイ・ワイダ インタビュー

☆☆　ポーランド月報　1989年4月号(通巻85号)　目次　☆☆

円卓会議からの報告

信頼をもって真実に基づいた話し合いを……3
円卓会議初日のレフ・ワレサによる冒頭演説
議論はここまで進んだ……7
円卓会議の進行状況　J・オニシケヴィチ

力をあわせて新しいヨーロッパを築こう……10
リトアニアの友人たちへ　レフ・ワレサ

社会の新しい仕組みをつくる……11
アンジェイ・ワイダ：インタビュー

ポーランド日誌……2／19
1988年12月1～31日、1989年1月13～31日

ポーランド日誌
1988年12月1日～31日
1989年1月13日～31日

12月2日　ミッテラン仏大統領が世界人権宣言40周年記念式典にワレサを招待したことが明らかになる。チェコが消費物資の国外持ち出しを禁ずる新関税規則を実施、ポーランド人旅行者がチェコでの買い物を国境で没収されるケースが続出し、ポーランド外務省はポーランド駐在チェコ大使を呼んで説明を求める。

12月3日　ダヌータ・ワレサ夫人、ワレサが訪仏のため前週に申請したパスポート発給が許可されたと語る。

12月5日　ラコフスキ首相が日帰りで東独を訪問、ホーネッカー議長らと会談。

12月8日　平和運動家J・チャフトウィチは西独を訪問し人権宣言記念日にヴァイツゼッカー大統領と会うべくパスポートを申請していたが、発給を拒否される。

12月9日　ワレサ、フランスに到着、彼にとって戒厳令以来初の外国旅行。国営PAP通信、通信省が電話に関する法規のうち通話内容の当局による監督〔すなわち盗聴〕を認める条項を廃止したと伝える。「連帯」はアルメニア地震被災者救援に100万スウォティ（後に2倍に増額）を寄付。

12月11日　グダンスクで14～18歳の若者を中心とするデモ隊が「連帯」支持のスローガンを叫びながら警察署を襲い、窓ガラス多数を割ったほか八トカー数台を破壊。警察隊が退却したため、衝突にはなかった。「連帯」スポークスマンはこの件への組合の関与を否定、「連帯」は暴力を否定しており、若者たちの意図がどうあれその行動は「連帯」の理念に反すると語る。

12月12日　パリで開かれた世界人権宣言40周年記念式典で、ミッテラン大統領はワレサと自由のために闘ってきたサハロフとワレサを称賛。ワレサは滞仏中にミッテラン大統領、ロカール首相、デクエヤル国連事務総長、ゲンシャー西独外相らと会い、サハロフ博士とも会談。記者会見では、「ポーランドの体制は正しい方向に向かって進みつつある、ただ改革のスピードは上げる必要がある」と語る。

12月13日　戒厳令布告7周年のこの日、各地で反政府デモ、一部では警察官との衝突も。ワレサ帰国。

12月15日　グダンスクの聖ブリギッダ教会でのワレサの記者会見の一部がポーランドのテレビで放送され

【19頁に続く】

円卓会議からの報告

【編集部注】 1989年2月6日から始まった「円卓会議」は、さまざまな紆余曲折を経ながらも、ポーランドと「連帯」にとって重要な成果を生み出しつつある。その詳細はいまだ明らかではないが、伝えられるところによれば、それは以下の通りである。まず第1に、「連帯」の合法化が最終的に確認された。4月にも労組法が改正され、正式に登録手続きが取られる予定である。第2に、政治制度の改革が合意された。強力な権限を持つ大統領制が導入され、一定の権限を与えられた上院が新設される。各県2名ずつの上院議員は「連帯」勢力を含めた自由選挙によって選ばれる。これまでの国会は下院として存続し、35%の議席が在野勢力に割り当てられる。新しい選挙法に基づいた国会選挙がこの6月にも実施される。円卓会議は3月20日で実質的討議を終え、4月3日に最後の全体会議を開催して合意事項に調印する予定である。このように進行する円卓会議に対する評価は「連帯」内部でも必ずしも統一されていないようである。たとえば、ブリュッセルにある「連帯」在外調整局は、「円卓会議での交渉は、実際には外見だけであり、当局はすべてかゼロかの最後通牒を迫っている」と非常に悲観的に評している（『ニュース・ソリダルノシチ』第128号）が、パリの『週刊「連帯」』編集部は、「一種の新しい社会協定の締結の可能性」を見ているようである（第212号）。いずれにせよ、今後の詳報を待ちたい。

信頼をもって真実に基づいた話し合いを

円卓会議初日のレフ・ワレサによる冒頭演説

Przemowienie Inauguracyjne Wygłoszone przez Lecha
Wałęsę w Dniu Otwarcia Obrad "Okrągłego Stołu"
Dodatek Specjalny, Biuletyn Informacyjny, Nr.211, 22.02.89

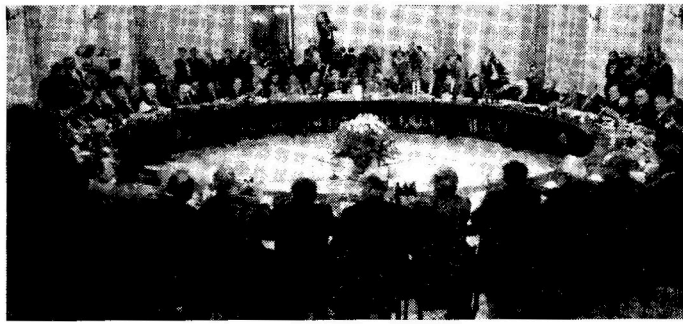
親愛なる皆さん！

われわれがこうしてここに集まっていることは特別な瞬間であり、これに多くのことがかかっています。われわれの会議は撮影用ライトにこうこうと照らされて始まりましたが、窓の外には悲しみや貧困への恐怖などが満ちています。われわれはここでおごそかな言葉を述べていますが、ポーランドに必要なのは事実であり、勇気ある決断であり、賢明でエネルギッシュな行動なのです。40年の長きにわたってあれこれの言葉が言われました

いったい何が生まれたのでしょうか？

だから、われわれの仕事を開始するにあたって私はこう言いたい、われわれはお互い同士話し合うのはもちろん、それだけではなくわれわれの声の届く限りの人々すべてと話し合わねばならない、と。1日の仕事を終え、商店へ走って行き、何時間も行列に並び、あといくらお金が残っているかを不快な面持ちで数え、どうやって月末まで暮らそうかと思い悩む――そんな状態では演説など聞く気にもならないし、言葉など信じる気にもなれないものです。そして、住宅を持たず、何の希望も持てずにいる若者がいったいどれほどいることか！

すべてのポーランド人がわれわれの言葉や決定の1つ1つの勘定を要求するでしょう。決定が下されない場合も同様です。数カ月間の困難な準備



ヤブウォンナ宮殿での円卓会議

それは氷を砕く作業にも似ていました　　を経て、ついにわれわれは「円卓」に着くところまでやって来ました。双方にとって遠い道のりでした。われわれの行く手には長くでこぼこの道があります。われわれの仕事の結果がどう出るか、確とはわかりません。このテーブルでわれわれは、国にとって最も重要なことは何かについて、可能な限りの合意に達しなければなりません。

まず何よりも相互理解を

しかしまず最初にやらなければならないのは、互いに理解し合うことです。なぜなら、相互理解は真実に基づいてのみ、つまり相違点や対立点を隠さないときにはじめて可能になるからです。だから、〔国の〕建て直しについての相互理解を見出さねばなりません。政治的、社会的独占の時代は終わりを迎えようとしています。建て直しは、一党体制の国を国民と社会の国へ変えるものでなくてはなりません。まじめに働けば自分も家族もそれなりの生活を送れる、という確信を国民に取り戻させるものでなくてはなりません、われわれがその方向に向かって進んでいくかどうかに、ポーランドの未来はかかっているのです。

われわれの目から見れば、ヨーロッパも世界も急速な進歩を遂げています。ところがわれわれは同じ場所にとどまったままです。われわれが現代的なものにお目にかかれるのは外国映画や外貨専門店のショーウィンドーでだけです。われわれの働く工場は古く、機械は今にもバラバラになりそうな代物で、原料も、工具も、アイデアも不足しています。家族を養うのさえ難しく、着る物を買ってやるのはなお大変、医療を受けさせるのもたやすいことではありません。われわれを治療してくれる人々〔医師、看護婦など〕や、子供の教育にたずさわる人々自身、貧困生活を強いられています。水も、大地も、空気もひどく汚染されています。

こうしたことの罪をポーランドの労働者や農民や知識人になすりつけないでいただきたい。長い時代にわたって世界中でポーランド人は堅実によく働き、多くの成果を上げてきました。ポーランド人は外国で橋を架け、病院を建て、多くの発明品を生み、優れたテープレコーダーや素晴らしい

コンピュータを生産しています。なぜ自分の国では怠けることがありましょう。

本当のことを言いましょう。われわれの努力は無駄使いされ、労働に対する報酬は悪く、何ひとつ正常な状態にないのです。これはシステムが悪いためであり、自由が欠如しているためです。いまだにわれわれの背後にはスターリンの亡霊がうろついているのです。

これ以上このままでいるわけにはいきません。これを変えねばなりません――ポーランドが生きてゆくために、ポーランド人が自らを自国の主人であると感じることができるようにするために、わが国の青年が祖国を捨てて外国へ行ったりしないようにするために、祖国が意地悪なまま母扱いを受けなくてすむように、農民が土地を放棄したり、労働者がただの雇われ人と感じたりすることのないように。

こうしたことを口で言うのは簡単です。実際にやるのは難しい。しかしとにかくやってみなければなりません。まさにそのことをわれわれはここで協議し、決定しなければならないのです。

「連帯」の復権から始まる

まず労働組合の複数制を復活させること、すなわち「連帯」の復権から始めなければなりません。1981年12月〔戒厳令〕以降の主要な対立はそこから始まったのですから。われわれは「連帯」を求めており、その権利があります。私は単にグダンスク協定の署名者の１人、独立労働組合議長としてのみでなく、この国の１市民、グダンスク造船所の電気工としてそう言っているのです。私自身の経験には少なからぬ希望の時と苦難の時がありました。

私はもう何度も、輝かしい未来についての約束や、「どうか手を貸してほしい」との呼びかけを聞いてきました。もう言葉づらを信じる気にはなれません。われわれは自らの意思と自らの必要による自分たちの組合を、労働者の利益を守りポーランドの国だけを主人として仕える組合を、持たねばなりません。これがわれわれの将来に対する最大の――唯一と言っても差し支えないほどの――保証です。賢明な労働組合は決して集団エゴイズムに陥ったりせず、全体のためにという責任感を持ち、力と希望を与えるものです。そういった労働組合は誰にも脅威を与えません。

自分たちの組合を持つ権利は農民や学生にもあります。従ってわれわれは、「農民連帯」や独立学生連盟の再合法化も望みます。結社に関する新しい法律は、すべての人に本当の結社の自由を保証するものでなくてはならず、結社の可否が行政当局の恣意的な決定に左右されるようではいけません。こうした方法で労働組合と社会の複数主義は、ポーランド人が空気と同じくらい必要としている自由な空間を創出するのです。

ポーランド経済の壊滅的状況はわれわれの最大の心痛の種です。誰もが、この状態は数十年かけてこうなったものであり、一朝一夕には是正されないことを知っています。魔法のような解決法はなく、不思議な力で願いをかなえてくれる金の魚もいません。この面では、とにかく通常の状態に戻らねばなりません。今一番大事なことは、暗礁から脱出して自分たちの進む方向を決めることです。

インフレをくい止めねばなりません。以前私は、給料日のたびにスーツケース一杯のお金を持ち歩かねばならないのはごめんだと言ったことがあります。今では野菜を買いに行くにもスーツケースがいるありさまです。このことは一般の人々に恐怖心を起こさせます　こんな状態では良い仕事を期待することも、節約をあてにすることもできない、と。

抜本的な経済改革を

だからこそ〔独占をやめて〕分かち持たねばならないのです。だからこそわれわれは、経済をノメンクラトゥラによる政治的独占から解放し、すべての所有形態に平等の権利を与え、市場の働きを回復させるような真の根底的改革を求めてきたのであり、これからも求め続けていくのです。改革は企業心を解放しますが、労働自体も失われていた意味を取り戻すでしょう。われわれはこういう改革の計画が立案されることを強く期待しています。また、国家財政の蓄えはどのくらいか、ど

の分野の支出が無駄で削減できるのか、について知りたいと望んでいます。ポーランドの労働者と農民の汗を無駄にしない賢明な改革案であれば、われわれは必ず支持するでしょう。しかしその案はどこにあるのでしょう？　それはわれわれが一緒になって作り上げ、その実行にあたっては社会によるコントロールが保証されるようにしなければならないのです。経済改革と再建への努力には、広範な社会の支持が必要だからです。そして、経営管理の改善や自由化が行われ、ポーランド人の生活水準が効果的に守られるという希望がない限り、人々は改革への支持を与えはしません。

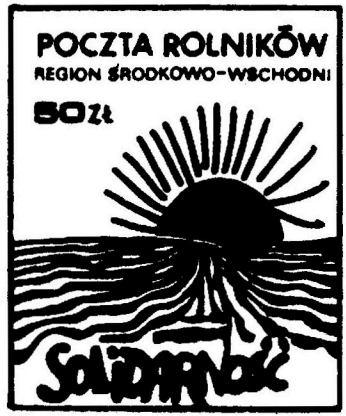
国家諸制度の民主化

また、経済改革と同時に国家改革も行われなければ、経済面でも社会生活面でも何ひとつ変えられないという点も明らかです。進むべき方向はひとつです。国家を民主的体制に、法の支配する場に、民族の尊厳と市民的自由の存在する国にしなければなりません。もしそれを一度に実現することができなくても、とにかくどれかから始めねばならないのです。

まず3つの分野から始めることが必要です。第1に、法と裁判制度。司法が真に独立した公正なものになるように。第2にマスコミ。マスコミは現在ほとんど完全に単一党の支配下におかれています。そして第3に、地方レベルの一番下から始めて、真の地域自治を回復させねばなりません。

ここまで話してきたわけですが、われわれは多くを要求しすぎているでしょうか？　われわれは、国が荒廃してしまったのを知っています。しかし荒廃させたのは地中に住む小妖精ではなく、市民から権利を奪い、労働の成果を浪費した権力システムです。今日では皆が、この状態からどうやって抜け出し、どういう形でポーランドを建て直すかに関して、われわれの共同責任のことを口にします。しかしそう言っている人々にこれからもずっと忘れないでもらいたい、共に参加した分だけ共同責任が生まれるというのが事の本質であることを。

われわれが「連帯」の復権を望むのは、「連帯」



自身のためではなく、国民全部のためポーランドのためなのです。われわれ全員がこの数年間のひどい経験を克服し、遺恨を捨て憎しみにうち勝たねばなりません。今日、ついにわれわれはこうして公の場で発言することが許されましたが、しかしわれわれはこの日を目にすることなく死んで行った人々のことを、苦難と苦悩の年月のことを、おとしめられ希望を奪われていた日々のことを、忘れてはならないのです。それらの苦しみについて勘定書きをつきつけるつもりはありませんが、損害は埋めあわせられなければなりません。

今日に至るまでわれわれが希望を持ち続けてこれたのは教会の助力によるところが大きいことも、忘れることはできません。今日われわれが話し合えるようになったことには、教会の叡知と経験が役立っているのです。

昨年5月と8月、グダンスク沿岸地帯とシチェチンの労働者が、ノヴァフタとスタロヴァヴァラの労働者が、そしてシロンスクの鉱山労働者が、「『連帯』なくして自由なし」と叫びました。われわれはこのスローガンに忠実でありたい。

政府側では、重大で決定的なことが起こりまし

た。われわれは、改革を達成しようとする政治的意思を見出しました。そこに達するのが容易ではなかったこと、そしてわれわれがこれからどのような形で共存していくかはそこに大きくかかっていることを、われわれは知っています。今後の共存の形についても、「円卓」で話し合うことになりましょう。

この円卓のまわりは国民の希望に取りまかれていますが、また不信の目でも見られています。われわれが円卓会議で苦労の末に何かを生み出したとして、それを受け入れない人々もでてくるでしょう。そのことを知らずにいたり、黙殺したりすることはできません。それでもやはり、われわれの扱っている事の重要性について、そして今必要とされている責任感について、すべての人が真摯に理解してくれることを望みます。

われわれが対話を始めようとしているという現在の状況からは、新しい国際情勢ももたらされます。その中でポーランドは「ヨーロッパの病人」であることをやめ、ヨーロッパの中で新しい地位を占められるようになるでしょう。すなわち、創造的な変化を成し遂げようとしている国、時代の流れに取り残されずに進んで行ける国という地位を。この点でもわれわれの責任は大きいのです。

われわれは信頼をもってこの対話に入ります。なぜなら、われわれはポーランドについて、ポーランド人について、「連帯」について、そしてわれわれ双方の意見が一致しているものも対立しているものも含めて様々な事象や問題について話し合うことになるからです。

われわれを信頼してくれる人がわれわれの力になってくれることを、私は信じています。なぜならこれは良いことなのですから。

〔訳：高橋　初子〕

議論はここまで進んだ

円卓会議の進行状況

J・オニシケヴィチとのインタビュー

Wywiad z Januszem Onyszkiewiczem Rzecznikiem Krajowej Komisji Wykonawczej NSZZ "Solidarność" i Komitetu Obywatelskiego

「円卓会議」の最初の2週間の進行状況を評価するにあたって、まず進展の見られた問題から始めようと思う。進展とは、1982年に定められた労働組合法の改正について政府の同意を得るのに成功したことだ。これは会議の始まる前からわれわれが議論の基礎と考えていたものだ。この改正によって「連帯」はその本来の組織形態、すなわち全国に存在する地域的形態の組合として合法化されることが可能になる。さらにわれわれは、その際、組合相互の関係に何の義務的制度もあらかじめ定めないようにするという立場で合意した。かわりに、たとえば、団体協約を結ぶことを目的とした交渉を行うときなどには、職場レベルで労働組合相互の合意を形成するという方式をとる予定でいる。

3つめの前進点は、農民組合創設を認める新しい法律を制定する必要があるとの考え方に関してだ。今までは、農村の状況は完全に他から切り離されてしまっていたが、これは単に農民に労働組合設立の権利がなかったためばかりでなく、これまでの法律が旧来の官製組織の独占を保護するものだったため、農民は一切の社会的・職業的組織を作ることができなかったせいでもある。

われわれにとって確実にプラスといえる点をもうひとつ、経済改革に関する分会での交渉で獲得した。つまり、われわれが要求していた賃金の物価スライド方式という原則に当局が同意したのだ。このことで問題が解決されたわけでは全くな

く、当局はこの物価上昇手当をわれわれとは違ったふうに扱いたがっている――手当算定の頻度を少なくし、物価高による賃金の目減りの全額ではなく一部分だけを補塡し、残りは各職場の経営状態に応じて払うようにしたがっている。われわれが合意に達したのは原則の点でのみだが、それ自体は極めて重要なことだ。

選挙制度の民主化

次の前進は、政府側の選挙制度の民主化に関する一連の声明だ。実際のところわれわれはその最終的な形についてまだ同意を表明しないでいるが、当局は反対派の代表も国会に議席を持たねばならず、より民主的な選挙を行ってゆく過程では一定の議席を反対派の議員に割りあてることが必要だということを認めており、良い方向へ1歩を踏み出したといえる。ただ、政府側連合ブロック――すなわち統一労働者党とふたつの小政党と様々な御用団体などの連合　　が支配勢力のままでいたいと望んでいる以上、どのくらいの結果が出るのかはまだわからない。〔反対派に割り当てられる議席の〕数はまだ示されていない。60%：40%というふうにも言われているが、実際にそういう提案があったわけではない。数字については今後の交渉過程で決定することにして、まず選挙について一定の原則を定めなければならない、ということだけが示されている。残念ながら、いわゆる「ドアにかかっているかんぬき」はこれひとつではない。もうひとつのかんぬきは、大統領制の導入に関する提案だ。大統領は、フランス大統領に比すべき、あるいはそれ以上の広範な権限を持つとされている。現在示されている計画によれば、大統領は軍の統帥者であり、国際条約の批准権、恩赦権、国家の高級公務員の任命権を持ち、首相任命権、大臣任命権も持つことになっている。また、国に戒厳令を布告することもできる。これは明らかにわれわれにとって最大の「斧」だ。なぜならこれはわれわれに戒厳令下でのすべての経験を思い出させるからだ。最後に、大統領は多数派政権を形成することができない場合には議会を解散させることもできる。こうした提案がわれわれに提示されている。われわれはまだそれを受け入れてはおらず、この問題を話し合う前に具体的な

円卓会議会場へ向かうZ・プヤク（左端）、L・ワレサ（傘を持っている）、T・マゾヴィエツキ（その右）

計画を文書化するよう要求している。今のところわれわれからみた評価は、若干誇張になるが「ひとつのドアにふたつの鍵」というところだ。

メディア利用に関しては、確かに政府はいくつかのことを宣言し約束したが、具体的な詳細の問題になると、われわれは壁にぶつかってしまう。政府は、新聞や雑誌の発行は市場の法則に委ねる用意がある、つまり普通の企業として扱うと言った。明言されたこの立場が意味するのは、新聞社や出版社を登録すればそれで十分で、新聞そのものについて許可を得る必要はもはやない、ということである。これは、好ましい方向への第1歩である。しかし、独立組織のラジオ・テレビ利用の問題になると状況は行き詰る。政府はあい変らずこれを政府の道具だと考えている。彼らの議論によれば、「分割が不可能な」テレビについては何らかの一体性を維持しなければならないという。なぜなら、たとえば同性愛者が週に5分、新しく結成される労働組合が2時間、エホバの証人が45分等々というふうに要求すれば、真のテレビ番組ができなくなってしまうというのだ。政府によれば、ラジオとテレビは単一の組織の管理下にとどまるべきで、この組織が適切と考える時に、適切と考えるテーマについてさまざまな人間を招けばよい、と。これが今日の会議における政府の主張だった。

用紙と印刷所の問題

政府は、出版に関する根本的な2つの問題はまったく討論しようとしなかった。つまり用紙の供給と国営の印刷所の利用である。用紙の分配に対しては政府が絶対的な独占権を有していることは誰でも知っているが、政府が自由に使える用紙の量は誰も知らない。政府は、国営の出版所に対して用紙全体の3分の2を割り当て、残る3分の1は文化省が受け取っていると推計されている。教会の出版所には2%が行く。われわれは用紙の分配を社会的統制下に置くことを提案しているが、政府はこの独占権の放棄を拒否している。同様にわれわれは、国家機関の排他的管理下にある新聞や書籍の印刷施設も社会的管理に移すことを望んでいる。この点に関してはいかなる前進も見られなかった。さしあたりわれわれは、大部数で発行される組合の日刊紙といくつかの週刊紙の発行を可能とする十分な量の用紙の割り当てを要求している。これは実現されるかもしれない。

その他のあらゆる問題（司法の独立、経済問題、鉱山の問題、その他）についても議論が始まった。政府は、すべての問題を話し合う用意がある、いかなる問題についても扉を閉ざすつもりはないと言明しているが、実際にはこの交渉では何の前進も実現されていない。

この2週間の交渉を要約するとすればこう言えるだろう。核心的な問題、つまり「連帯」の合法化については事実上の大きな前進があったが、その他のすべての問題については、議論はきわめて緩慢かつ困難である、と。今後を見なければならない。

明日は地域自治と結社権についての交渉が行われることになっている。

政党結成権についていうなら、われわれは円卓会議においてこの問題に何らかの解決が見られるよう圧力をかけるつもりはない。そうではなく、結社の自由を可能にする状況を作り出すよう、一貫して要求していくつもりでいる。

（このインタビューは1989年2月20日、パリの「連帯」情報編集部によって行われた）

〔訳：水谷驍・高橋初子〕

力を合わせて新しいヨーロッパを築こう

リトアニアの友人たちへ

レフ・ワレサ

Message to Lithuanian Friends, Lech Wałesa
News Solidarność, No.128, 15～28, Feb 1989

【『ニュース・ソリダルノシチ』編集部注】
1940年に〔スターリンの〕ソ連に強制的に併合されて以降はじめて、リトアニアで2月16日の独立記念日〔1920年、ロシア革命政府が認めた〕を祝う集会が開催された。集会を主催した国民戦線組織からポーランド「連帯」指導部に対して招待状が送られたが、以下はこれに対するワレサ「連帯」委員長の返答である。〔訳：水谷　驍〕

2月16日のリトアニア独立記念日を祝う集会にご招待いただいたことに対し、ヤツェク・クーロン、ヤヌシュ・オニシケヴィチともども、心からの感謝の意を表明する次第です。ヴィリニウス〔リトアニアの首都。ポーランド名はヴィルノ〕を訪れてみなさんと会うことは、かねてからの私の夢でした。ところが非常に残念なことに、円卓会議に伴うさまざまな仕事のために今はポーランドを離れることができません。ここにわれわれの心からの挨拶を送ると同時に、民主主義を求めるあなたがたの努力の成功を期待したいと思います。

リトアニアに多くのポーランド人が住んでいるのと同じように、ポーランドにも多くのリトアニア人が住んでいます。偏狭な人種的言い争いではなく、人権と自由の全面的な実現こそが、諸民族の混在から生じる諸問題を解決するという確信に基づいて、「連帯」市民委員会は人種問題を検討する小委員会を設立しました。

正当な権利を求める闘いにおけるリトアニア人の一貫した不屈の精神は、ポーランドで広く尊敬されており、多くのポーランド人にとって模範となっています。和解と協力をもとめる地下出版物のなかにその証拠を多数見出すことができます。両国における現在の民族的、市民的ルネッサンスの流れは、実り豊かな新しい関係の創造に強い希望を抱かせるものです。平等で友好的な隣人として、われわれは新しいヨーロッパを築く作業にともに貢献できるでしょう。この理想が現実となることを期待します。

社会の新しい仕組みをつくる

アンジェイ・ワイダ　インタビュー

To Construct New Social System
Interview with Adrzej Wajda, 19 Feb. 1989, Tokyo

【編集部注】 以下は、ドストエフスキーの原作に想を得た注目の演劇「ナスターシャ」の演出のため最近日本を訪れたポーランドの著名な映画監督・演出家アンジェイ・ワイダ氏〔わがポーランド資料センターの幹事でもある〕とのインタビューの一部である。インタビューは新日本文学会の主催で行われ、全体は『新日本文学』夏号に掲載される。同会のご好意により、ポーランド問題を論じた部分をここに訳出、紹介する。聞き手は、ロシア文学者の江川卓、原卓也両氏である。翻訳にあたってはマヤコフスキー学院ポーランド語教室の皆さんのご協力を得た。〔訳：水谷　曉〕

ペレストロイカとグラスノスチ

江川：最初に、最近ソ連に行かれて、そこでペレストロイカについてお受けになった印象を。

はい。これまで私は何度もソ連を訪れました。だから比較の基準があります。今度の滞在はわずか1週間で、それもモスクワだけでした。したがって見聞は限られています。要するに私が見たこと、モスクワで生じていることをお話しするわけです。

最も印象的だったのは、グラスノスチと言われるものに関する限り、実際にそれが見えたことです。私は、モスクワ大学の学生や先生、作家や映画製作者に会い、『リテラトゥールナヤ・ガゼータ』や『アガニョーク』、『イスクストヴォ・キノ（映画芸術）』の編集部を訪ねました。これら知識人世界のすべてにおいて、ぜひ言っておかねばなりませんが、人々はまったく自由に話していました。政治について、また……。以前は、このような公の場で、こんなことは聞いたことがありませんでした。そこでの議論のさまは、たしかに自由が存在することを証明しています。

一方、ペレストロイカなるものについて言えば、そんなものは何も見えませんでした。ペレストロイカが現実となるためには、何か新しい、これまで知られていない民主主義的な仕組みがまず現われなければなりません。話したことがあとで本人の不利に利用されないような、そのような保証となる仕組みです。今日発言できるからといって、明日もまた発言できるという保証は全然ないのです。

〔グラスノスチに関して言えば〕この過程は、他の世界よりも知識人の世界で最も進んでいます。もちろんすべての知識人が、というわけではありません。一部の知識人は、あのノメンクラトゥラとしっかり結びついており、そっちの方を向いていて、この過程にはまったく関与していません。言ってみれば、これは部分的な過程なのです。

日常生活がどんなであるかを観察する機会もありました。現在の生活は、以前に比べて非常に苦しく、惨めで、悪くなっています。もちろん、生活条件が悪化しなければグラスノスチもペレストロイカも決して問題にならなかったでしょう。こんな生活条件だからこそ……きっと彼らは何らかの方法で……。

スターリン流の人間改造

私の理解するところ、問題は以下の点にあります。人間改造というスターリン流の思想が成功したのです。その思想の核心は、人間からイニシアチブを――いわば主体的参加の可能性を――奪うことにあります。人間は共産主義国家という大き

な機械の歯車でなければなりません。それには成功しました。うまくいきました。だが、その結果を予見できなかったのです。この歯車で組み立てられた機械が動かなかったのです。こんなことは誰も予想できませんでした。なぜこの機械が動かないのかについては、さまざまな説があります。いずれにせよ動かないことだけは確かです。これは、ソ連が西側世界の工業や科学、技術の拡大に対抗できないことを意味します。おそらくぜんぜん対抗できないでしょう。

変化の開始を可能とするために、ゴルバチョフはある状況を作ろうと努力しています。つまり、ソ連は病んでいる、だから回復のために何かをしなければならない、と人々が自覚するような状況です。彼は激しい批判の口火を切りました。何よりも彼の前任者や、いま現在機能している特定の仕組みの。この批判が社会をゆさぶり、現実に対して冷淡な彼らの態度をいくらか変えるはずだとされています。しかし、私の考えでは、それはおそらく何も変えないでしょう。というのも、変化を可能とするのは、言論の自由を守り、国家に対して自衛する社会全体と個人の権利を守る新しい仕組みの形成だけだからです。このような仕組みは、もちろん、社会が政府に対してそれを強要する場合にのみ、形成されえます。いかなる政府も、強要されないかぎり、そのような仕組みは作ろうとはしないでしょう。そのような仕組みは政府を縛るものだからです。

この問題については新聞で読んだり、報道から知ったかぎりで言えることですが、ソ連では、ずっと大きな何らかの役割を演じることができる運動は、グラスノスチやペレストロイカよりも民族的な運動の方です。というのも、それぞれの民族が、完全に奪われたままになっている自らのための最低限の権利を要求しているからです。もちろん、これは主としてリトアニアやラトヴィア、エストニアに関わることですが、アルメニアの運動も同じような意味を持っています。

フルシチョフ時代の雪解けとの違い

原：かつてフルシチョフの雪解けに感激した１人ですが、その後ブレジネフの沈滞の時代にロシア文学に「サヨナラ」を言いました。ゴルバチョフ時代になっても最初のうちは非常に懐疑的でしたが、日本に来たヴォズネセンスキーが「決して後戻りはしない。これは新しい革命だ」と言ったのを聞いて、少し考えが変わりました。確かに「歯車」が発言しはじめたようです。ペレストロイカは雪解けと違うと言えば楽観的に過ぎるでしょうか？

A・ワイダ監督

確かに、〔フルシチョフ時代の〕雪解けとペレストロイカには共通点があります、つまりどちらも政府のイニシアチブである、という点です。この点についてはこう言う人がいます。ロシアはいつもこうだ。ロシアでは政府だけが進歩的で、社会は決して進歩的ではない、と。そうなるほかないのだ、というのもロシアでは政府だけが知性を、何か高い理想その他を持っているからだ、と。しかし、われわれはこのような考えを認めることはできません。そのような視点に立ってはなりません。それは非常に反動的な視点です。

もちろん、ペレストロイカは、雪解けに比べればかなり先まで進むはずの、言ってみればはるか

にずっと創造的なプロセスであるとされています。だが、ゲルマンという劇作家と話をしたのですが、そのゲルマンに聞きました。全体としてこれをどう考えているか、今起こっていることをどう見ているか、と。彼は、このグラスノスチやペレストロイカの側に非常に深くコミットしており、政府にも近い人です。その彼が言うには、昼食までは私はまだ楽観論者であるが、昼食後にはもうまっ黒な悲観論が私を捉えている、と。私の感じでは、これが知識人の大多数が抱いている感想です。次に、あの有名な歴史家のエ・ゲルマンが私に言いました。われわれは勝たなくてはならない、なぜなら、われわれには引っ込むべき場所がない、後退すべき場所がないからだ、と。

ここから私はこう結論します。すべては、政治的領域ではなく、心理的領域で受け入れられているにすぎない、と。すべての人がこうあって欲しいと望んでいますが、それは願望であって事実ではない。なぜなら、検閲を、検閲活動を制限するいかなる仕組みもないからです。検閲機関は自らの活動を制限することを自分で決めています。裁判所は寛大になっていて、反対派を監獄に入れません。しかし、裁判所はソ連では独立した機関ではなく、そうするための措置は何も取られませんでした。

もっと例をあげることができます。つまり現在は認められている自由のすべてが、明日は同じ機関によって取り消される可能性があります。検閲機関は明日はかつてやっていたように検閲を始めるでしょう。裁判所は以前に下していたのと同じ判決を下しはじめるでしょう。

ポーランドとの違い

なぜこういうことを言うのかといえば、状況が正反対のポーランドの観点からすれば、すべてがこの上もなく明白だからです。ポーランドではこれらの自由すべては社会によって強制されたものです。すなわち、政府はそのようなものは何一つ社会に与えませんでしたし、今も何一つ与えまいとして頑張っています。しかし、社会の圧力が十分強力であるため譲歩しなければなりません。パリ

ワイダ監督の映画 鉄の男 のポスター

でレフ・ワレサに会ったサハロフが言ったということです。これはワレサ自身から聞いた話です。あなたは幸せな人間だ。一緒に数百万の人間がいるのだから。私はたった1人だ、と。ここに根本的な違いがあります。

もちろん、こう自問する必要があります。ポーランド人はどのくらいの自由を達成できるのか、どこまで進むことができるのか？　この問題は、1980年と1981年の全休を通じてやはり熟考されました。「連帯」は行き過ぎていないか、という問題が提起されたからです。限界は何か、それはみんなが知っています。それは、ソ連がポーランドに有する利益の問題です。すなわち、ポーランドでは、1つのことを除いてすべてを変えることができます。つまり、共産党の統治ということを除いて。ソ連の確信によれば、共産党はポーランドにおけるソ連の利益の唯一の保証人です。この状況は変わるでしょうか？　考えなければなりません。私の考えでは、ソ連はおそらくまだ、政権につくかもしれない何か別の集団に自らの利益の保証人を見いだすような段階には達していません、ソ連政府はおそらくまだこのような時点には到達

していません。もう1つ言いたのですが、ソ連の利益は「帝国」の利益で、党派的集団の利益ではありません。理論的な問題としては、ソ連の利益が保障されるならば、その利益がポーランドの共産主義者によって保障されるのか、反対派によって保障されるのかは、ソ連にとって重要ではないはずです。ところが彼らはまだそこまで成熟していません。

暴かれた「公然の秘密」

いま現在ポーランドでは政府と反対派の間で交渉が続いています……。そこでワレサが演説しました。それはもうポーランド語で読むことができます〔本誌3頁以下〕。この演説がなされたという事実が非常に重要です。というのも、過去40年の間公然たる秘密だったことが初めて語られ、公式の新聞に印刷されたからです。つまり、2つの事実です。

第1に、共産主義政府はソ連の銃剣に乗って、ソ連の軍隊に乗ってポーランドにやってきました。「銃剣に乗って」とはよく言ったものです。いい表現です。いずれ日本の言葉にも入るでしょう、ハハハ……。きっとお役に立つ。これに関連しますが、重要なことはこの政府が、外からやって来たために、社会的に支持されていないことです。40年たってもその支持を作り出していないことです。誰にも聞こえるようにはっきりと語られた2番目の事実は、わが国経済の厄災のすべての責任がただもっぱら党に帰せられることです。党だけが40年にわたって統治し、他の誰にも発言を許さなかったからです。党はこの責任を逃れることはできませんま。

動きのとれない体制

原：1月のポーランド党中央委員会総会で、ある党高官が共産党独裁はもはや神話であると言っていますが。

ある言葉から別の言葉に翻訳されると、おそらく単純化されるような気がします。彼らは決してそのようには考えませんし、そのようには語りません。

党は一枚岩ではありません。共産党は自らの原則では一枚岩で、党規律〔の厳守〕を義務づけられています。かつては規律違反は死をもって罰せられた。従って冗談ではなかったのです。しかし党にはさまざまな見解があります。その一部は、なにか権力の一部を譲歩すべきである、さもなければ、社会を積極的な参加に動員できないからだ、と主張しています。党のもう1つの部分は、ほんのわずかの譲歩も党政権の全面的な解体の原因になると考えています。ちょうど、1980年にそうなったように。

この党は、言ってみれば統治の正当性を持たないために、自らに競争する何かの別の集団が現われれば、彼らがまだ追いかけてもこないうちに、ただちに彼らから逃げ始めるのです。ここで、いったいなぜ政府の頭の中に、社会との対話といった、何かの代表を探すといった問題が浮上したのか、という問題に答えなければなりません。このような問題が提起されています。答はおそらく1つしかありません。現にある共産主義体制はある種の限界に行き着いたのです。すなわち実現し

たいと望んだことすべてをまさに実現してしまったのです。それは今この瞬間、まさに理想的な、その純粋な姿をとっています。ただしもはや身動きができない、自ら自身を麻痺させてしまったのです。

社会を恐れる政府は、非常に複雑な、大規模な、前代未聞の抑圧と統制の機関を作り出しました。統制と抑圧の。そして現実に、10年間にわたってこのシステムを用いて、ポーランドを完全な麻痺状態に追いやったのです。誰も何もできません。

これはポーランドの場合について言っているのですが、しかしある程度はソ連にも関係します。要するに、ホーランドの共産主義政府がなぜ、反対派と対話するのかを説明しているのです。つまり、すべての制度は統制を目的に組織されています。文化芸術省は、いかなる文化も芸術も生まれないよう番をする役目を負っています。というのもの、文化は、人間の頭を明るくし、その地平を広げて、すべて複雑にするし、芸術はいつも政府に反対するからです。もちろん、かつてスターリン時代には、文化芸術省は社会主義的な新しいタイプの芸術と文化を作り出すことができるという信仰がありました。今日ではもう誰もこんなことが可能だとは信じていません。しかし、統制、いかにして統制するかという考えは残りました。たとえば電話です。電話は一方から他方にかけるために、お互いに話をするためにあるのではありません。電話は盗聴するためにあるのです。それぞれの機関が名前とは逆のことをやっています……。産業省の仕事は、いかなる産業も存在しないように、発展しないようにすることです。つまり、誰かが生産活動を開始しないように規制することでした。誰かが何かの生産を始めれば、その人間は何らかの独立性を手に入れ、何かを要求するようになるからです。このようにしてこのシステムは、完全な麻痺へと導かれていったのです。

カギを握る労働者階級

パリにいるミハイル・ヘレルとブザンソンの2人の教授がいま新しい理論の研究を進めています。その成果はおそらく近く読むことができます。その理論によれば、ソ連では昔からの労働者階級と労働組合の理想が、もっぱらゼネストを現実の

ワイダ監督　左は夫人で女優のクリスティナ・ザフヴァトヴィチ　夫人は「鉄の男」では主人公ビルクートの妻役を演じた

ものとするために実現されている。つまり労働組合もなく、指導者もいないが、みんながこんな簡単な方法でストをしている、仕事を拒否するのです。ポーランドにも似たような状況があります。というのも、人々は仕事の意味を知らず、結果を知りません。第1に、この仕事が彼ら自身に生き甲斐を見い出す可能性を与えるとは考えていません。第2に、彼らがそのために働いている国家がこの労働の成果を手にしたとも考えていません。要するに、参加していないのです。で、いかにしてこれは克服できるか。もう1度スローガンを掲げることはできません。社会はもう聞き飽きている。政府がその克服を約束するのも不可能です。政府はすでにあらゆることを言ってきたし、40年にわたって約束してきた。その何も実現されませんでした。だから、政府は、社会を代表するというまさにその事実によって社会を動員できる社会的な何かの組織を許可しなければなりません。わたしの念頭にあるのは「連帯」ですが、これに限定されるわけではありません。

他方、行動の可能性が保証されないかぎり、社会に対して何を約束することもできません。しかも、この保証は制度的なものでなければなりません。ここで話の初めに戻ります。あの円卓会議では、初日に「連帯」の復権だけが議論されたわけではありません。司法制度の改革の必要性が語られました。司法制度は独立していなければなりません。さらに、おそらくワレサ委員長は、検閲の制限その他についても話したでしょう。国家の機構全体がその権限、あるいはその一部を別の誰かに委ねなければなりません。

ところで、ポーランドでは、いま言ったような意識がわが国社会の大きな部分に存在します。ソ連社会のどれだけの部分がこの意識を持っているかはわかりません。おそらく、ソ連でも知識人はこの意識を持っています。しかし、知識人は小さな集団で、いかなる時にも、いかなる国でも、革命的な役割を果たすことはできません。これは歴史が教えるところです。知識人は革命に参加することはできますが、この革命で重要な役割を果たすことはできません。とるにたる力を持っていないからです。強力な力を有するのはただ労働者階級だけです。ポーランドでは、知識人の間でこのことが意識されています。ソ連の知識人の間にはこの意識は認められませんでした。

カティンの森の真相

原：昨年3月、ポーランド国会で、今こそカティンの問題を論じなければならないという発言がありました。2、3日前の日本の新聞でも、それがソ連の仕業だったことを示す証拠が明らかになったと伝えられました。ポーランド国内では真相はどこまで明らかにされているのでしょうか。

じつはわたしの父もそこで虐殺されました。

今のところ、もっとも重要なことは語られていません。もっとも重要というのは、この将校たちの虐殺者が、ソ連の官吏、ソ連の警察、ＮＫＶＤであることです。このことが語られていません。この問題を調査するポーランドとソ連の合同の歴史家による委員会が任命されました。しかし、もちろん、調査は純然たるフィクションです。第1に、問題はすでにすべて正確に解明されています。というのは、戦後、これを自分の問題と考えた人

政府系週刊紙 ポリティカ にもカティン事件の記事が掲載された（一九八九年二月十三日付）

々がいました。まず、ロンドンのピウスーツキ元帥研究所がこの問題を調査し、証人を集めました。『カティン』というタイトルで、アンデルス将軍の序文がついた非常に正確な本が出ています。ここには、ドイツ軍が掘り出した遺体のすべての氏名のリストがあります。ドイツ軍は一部を掘り出しただけでした。そこには、4,000から5,000の遺体があると推計されましたが、そのうち掘り出されたのは1,000少し、1,500くらいでした。一方、ソ連で死んだ将校の数は全部合わせれば1万5,000を下りません。つまりソ連にはまだこれらの残りの人々の墓があるということです。

私は今、あるドキュメンタリ・フィルムの製作にとりかかっています。この問題を自分で経験して知っていて、今も生きている最後の人たちに出会いました。ユゼフ・チャプスキという人です。彼が助かったのは、将校の一部、数百が選り分けられ、別の収容所に送られて、死刑を免れたからでした。アンデルス将軍の部隊の編成が始まって、彼はこの部隊に出会い、あの時の将校を探しました。つまりこれは彼の報告なのです。ロンドンにはこういう人がいました。列車から降ろされた犠牲者がトラックに積みこまれていた駅までいって、そこから戻ってきたただ1人の人です。そう、彼はカティンに行くトラックを見たのです。私の映画に彼の報告があります。私は、この問題に関するラチンスキ大統領――ロンドン政府のですが――の報告書を持っています。

もちろん、カティンに連れていかれた人々は誰も助かりませんでした。1人づつ射殺されたからです。

私も、まずそこへ行くつもりです。しかしまだ正式の許可がおりません。

ところで、ポーランド側もソ連側も、真実を認めることになぜこれほど消極的なのでしょうか。

この問題に答えて見ましょう。ソ連側もポーランド側もこれを認めたくないのは、これがこれらの人々の虐殺だけの問題ではなく、同時に最も重要な政治的な問題でもあるからです。ドイツ軍がこの墓を掘り起こし、これはソ連軍の犯罪だと発表した時、ロンドン亡命政府は何か発言しなければなりませんでした。1万5,000の将校の問題に関してただちに行動しないわけには行かず、そこでスイスの赤十字に自分を代表して行動するよう要

請しました。ドイツと戦争していたため現場に行けなかったからです。スターリンはこれを背信行為とみなしてロンドン政府との関係を断絶し、自らの共産主義政府を組織しました。

この事件がドイツの犯罪とされているかぎり、ポーランドに移植された共産主義政府はたんに、ソ連に任命された政府であるにとどまり、偽りの基礎上に組み立てられた政府であることは証明されません。スターリンがこれらの将校を虐殺したと言うだけでは不十分です。さらに、連合国をだまし、ポーランドに自分の政府を、つまり共産党政府を作るために利用したのでした。このことすべてが明らかにされなければなりません。このことが言われなければなりません。しかし、いまでもきわめて困難な状況下にあるポーランド政府は、さらに困難な状況に直面するでしょう。だから認めたくないのです。

ポーランドの破壊＝スターリンの目的

江川：日本とソ連の間にも何十万人の捕虜のシベリア抑留問題がありました。多くの人が重労働の中で死にましたが、ソ連は今日にいたるまで真相を明らかにしていません。このようなスターリン時代のやり方は今も残っているのでしょうか。

いずれ彼らも真実を語らなければならなくなると考えます。そう期待します。もちろんすべてはスターリンがやったことだというふうに語られるでしょう。しかし、あれはヒトラーがやったことだとドイツ人が言うのと同じように、300万人のユダヤ人を虐殺するためには、あるいは1万5,000のポーランド人をはじめ100万の人間を虐殺するためには、これを実行する数百万人がいなければなりません。ヒトラーがその虐殺を実行する人間を持っていたのと同じように、ソ連にもそういう人間がいたはずであり、同じようにソ連でもこれら犯罪者の多くがまだ生きています。その多くが昇進し、この仕事を実行したというまさにその理由で報酬を与えられました。

もちろん、これができたのは、すべてが非常に組織的に進められたからです。事務所には、このすべてを記録し、分析する人がいました。カティンでは、モスクワからの指示がなかった人は1人も射殺されませんでした。これは証明されています。つまり、どこかの収容所のある司令官が突然なにかを決めた、ということではないのです。誰が助かったのか？　誰が、どの将校が選ばれたのか？　助かったのは、何らかの政治的な問題があり、その名前がまだ調査されており、何かの理由で必要があって、ある収容所から別の収容所へ移された人々でした。しかしながら、スターリンの目的は、ポーランドを全体として破壊することでした。ポーランドを破壊するためには、ポーランドの知識人を破壊しなければなりません。あの1万5,000の将校のうち、職業軍人はごく一部だけで、あとは予備役の将校、つまり教師や医師や大学教授、つまりわが国の知識人の精華でした。そうだったのです……。

働かせるために人を連れていく、「帝国」のために働かせる、というのは古めかしい考え方です。ヒトラーもスターリンもある同じ考えを持っていました。つまり抵抗を根絶する、ということです。ユダヤ人にはどうしても理解できないことがありました。戦争も終わりに近いころ、ドイツ人が労働力をもっとも必要としていた瞬間に、なぜ弾薬工場や兵器工場その他で働くことのできるユダヤ人のすべてを一貫して虐殺したのか、ということです。違うのです。イデオロギーが自己保存の本能よりも重要だったのです。

【2頁から続く】

る。先日の暴力事件についてワレサは、「改革の進行が遅れすぎるのも原因」と述べる。

12月18日　ワレサ委員長、活動家、知識人、教会関係者ら128名を集めた会合を開き、「市民委員会」を発足させる（本誌3月号を参照）

12月20日　党中央委員会総会が2日間の予定で開幕。ヤルゼルスキ第一書記は断固たる改革を訴える。「ウ」書記は、来年度は大幅な財政赤字が見込まれるため、国防費を含む歳出削減が必要と報告。

12月21日　中央委総会でメスネル前首相ら6名が政治局員を解任され、チオセクら改革派8名が新たに任命される。またラコフスキ首相を含む1名が中央委書記からはずされる。この人事は党内改革派の勝利とされるが、投票においてはなお保守派の反対票もかなりの数にのぼった。ラコフスキ首相、前提条件なしで円卓会議を開く時期が来たと語る。

12月23日　国会で企業活動に関する2法律が可決。私企業に国営企業と同等の地位が認められ、私企業設立の認可を受ける必要がなくなる。また外国人のポーランドでの企業設立も容易になる。戦前から弾圧されて活動し、戦後は反対派活動家の弁護にあたった旧KOR活動家、A・スタインスベルコヴァ女史が死去。

12月27日　PAP通信、来る1月1日から石炭とガソリンの配給制が撤廃と伝える。

【1月1日～12日の分は前号に掲載ずみ】

1月13日　アンジェイ・ワイダ監督、カティンの森事件に関するドキュメンタリー映画の製作に着手したと語る。

1月15日　ウィーンで全欧安保協力会議が最終文書を採択。

1月16日　第10回党中央委総会が始まる。

1月18日　中央委総会は、「連帯」が社会主義体制内の一勢力であることを宣言し、労組活動のみを行い、反社会主義的急進派と一線を画し、西側反共勢力からの資金援助を断ち、また政府の改革プログラムを支持し、1991年5月3日までの「試行期間」中にはストを行わない、等の条件をつけて、「連帯」の再合法化を決定。

1月19日　NZS（独立学生連盟）の組織した学生デモや集会が各地で行われる。

1月20日　1947年、および54～70年に首相を務めたユゼフ・ツィランケヴィチが77歳で死去。

1月21日　反対派を支持したことで知られるステファン・エエジュラク神父（71）がワルシャワで首の骨を折られて死んでいるのが発見される。神父に近い人々によれば、神父は生前、殺害の脅迫を受けていたという。ワルシャワ・ラジオは23日から石炭とコークスの公定価格が平均15%値上げと伝える。T・コンヴィツキの小説『小黙示録』が初めて地下出版ではなく公的出版社から出版される。

1月22日　PAP通信によれば、ポーランド緑の党が初の記者会見を開きエコロジーを守る民主的・平和的党であると表明。「連帯」全国委員会は声明を発表、当局のポーズとしての「連帯」再合法化案を受け入れ、党、政府との話し合いに入る意向を表明。

1月25日　NZS合法化の可能性を問われたオジュホフスキ政治局員は、NZSがストや社会不安を起こすような行動を行わない建設的組織であれば合法化もありうると答える。

1月26日　外務省スポークスマン、円卓会議は2月5日か6日に開幕と語る。

1月28日　ワンサ記者会見、円卓会議にはA・ミフニクとJ・クーロンも参加することを明らかにする。「連帯」が政党になるのではとの問に対しては、「われわれは強力な良い労働組合でいたい」と答える。

1月29日　中央統計局の報告書によれば、1988年のポーランド経済は高いインフレ率と不均衡の拡大が特徴であった。

1月30日　ビアウィストクの親「連帯」神父S・スホヴィレツ（31）の自宅が火事になり、神父が窒息死。同神父も殺害の脅迫を受けていたという。

〔訳編：高橋初子〕

編集後記

☆新聞等ではあまり報じられませんが、円卓会議その議論には非常に注目すべきものがあります。上続き新設してここでは「連帯」勢力を含めて自由選挙を実施する、というのはその最たるものでしょう。詳報が待たれます。

☆4月3日に合意事項に調印し、「連帯」を合法化、6月には選挙の実施、と急ピッチでの事態の展開が予定されています。「連帯」の第2回全国大会もやがて日程にのぼってくるでしょう。

☆コメダ氏のインタビュー、新日本文学会および関係者に重ねてお礼申し上げます 89.3.22（み）

☆☆ ポーランド月報既刊号目次 ☆☆

1988年10月号（通巻79号） 24頁 400円

時間の問題となった「連帯」の復権 在外調整局…3
1988年8月：事態の記録……6
ゴルバチョフ書記長のポーランド訪問にあたって…7
「連帯」全国執行委員会声明
ポーランド・チェコスロヴァキア連帯委員会声明…8
4～5月のストライキについて……9
「連帯」マゾフシェ地区指導部の声明
ポーランドの危機克服のために B・ゲメレク……12
「連帯」、ワレサ委員長と教会、ヴロツワフ……18
ポーランド旅日記抄 水谷 驍
ポーランド日誌 1988年6月24日～8月9日…2／22

1988年11月号（通巻80号） 20頁 400円

当局との対話再開に向けて……3
「連帯」全国執行委員会のコミュニケと声明
チェコスロヴァキア侵攻20周年にあたって……4
東欧共同声明――1988年8月21日
ポーランドのための危機克服協定とは？……5
ブロニスワフ・ゲレメクとのインタビュー
改革は本当に可能か――ゲレメク教授に反論する…8
『週刊マゾフシュ』匿名読者の手紙
改革か 革命か 停滞か ポーランド社会学会…10
「連帯」「ワレサ」「レーニン造船所」……14
はじめてのポーランド 満島 裕直
「連帯」が期待するもの 政府当局が期待するもの
「連帯」在外調整局……18
ポーランド日誌 1988年8月14日～9月3日……2

1988年12月号（通巻81号） 20頁 400円

今なぜ円卓会議か――ワレサは語る……3
チャンスは見逃せなかった／より賢明なより すぐれた「連帯」に／冒険主義に走ってはならない／なぜ私はこの決定を下したのか／「連帯」は要求する
円卓会議は何を実現できるか T・マゾヴィエツキ…7
われわれは話し合いを避けてはいない……10
党中央委総会でのヤルゼルスキ結語演説
円卓会議：テーブルの周りのダンス……12
『ポリティカ』紙による女子高校生インタビュー
黙せる大衆の獲得のために J・クーロン……16

1989年1／2月号（通巻82／83号） 36頁 500円

レーニン造船所の防衛のために……3
「連帯」全国執行委員会声明 1988年11月5日
円卓会議に向けて
国民的和解の前提：「連帯」の復権……4
W・フラシニュク
双方に要求される現実主義 K・モゼレフスキ…6
「連帯」復権の可能性：統一労働者党第8回中央委総会が示したもの D・フルシャフスキ……8
1980年8月協定の哲学 ヤン・シチシェレツキ……12
消えゆくチャンス：「連帯」の改革10原則……18
R・ブガイ／A・ヴィエロヴェイスキ
春風は吹く、東から A・ロジェヴィチ……28
ポーランドに心の小包便を送ろう……31
「1キロ運動」に協力を 工藤 久代
ポーランド日誌 1988年9月4日～11月15日……32

発行所・ポーランド資料センター 〒101 東京都千代田区三崎町2－10－5 一国ビル3F
電話 03－261－2585 郵便振替 東京 2－81069
Center for Polish Research c/o Kazukuni Bldg. 3F 2－10－5 Misakicho Chiyoda-ku Tokyo 101
事務所は月・水・金 14：00～17：00 定価400円・年間定期購読料4600円（送料共）